1 海女の歴史

海女はいつ頃からいるのでしょうか。

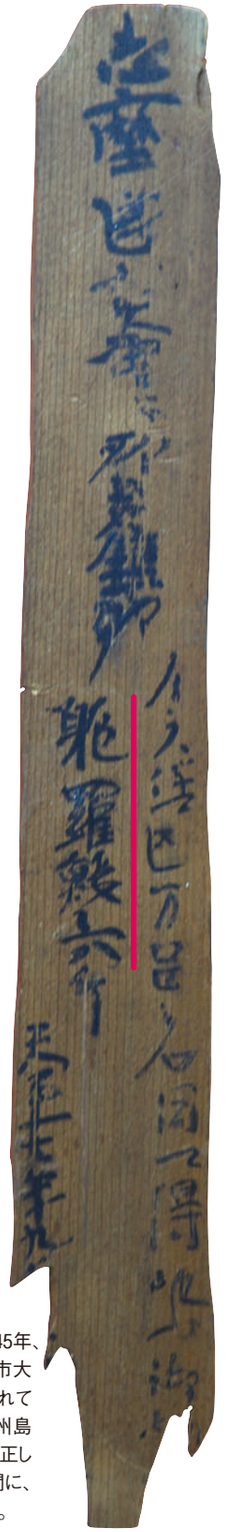
日本列島には、５千年くらい前、縄文時代の中頃すでに、海女のいた痕跡が見られます。

３千年以前と推定される鳥羽市浦村の白浜遺跡からは、大量のアワビ殻とともに鹿角製のアワビオコシが発掘されていますから、きっと海女がいたことでしょう。

また、天平17(745)年の年号が記された木簡が平城宮跡から出土し、志摩国名錐(波切)からアワビが送られた記録があり、海女の存在が推測されます。

万葉集にも女性のあまを歌った作がありますが、文献にあらわれる最も古い志摩国の記録は、延喜式(927年)にあって『志摩の国の海産物をお供えする〝潜女〟は30人である。その潜女には衣服の代金として伊勢の国の税から稲束を与える』と記されているのが最初です。

また、この地方では伊勢神宮と海女との関係も古くからあり、伊勢へ天照大神をお祀りした倭姫命が、神さまの食べものを探して鳥羽市の国崎へ来たところオベンという海女に出会い、以後、国崎から神宮へアワビを奉納することになったという言い伝えがあり、その伝統は今も受け継がれています。

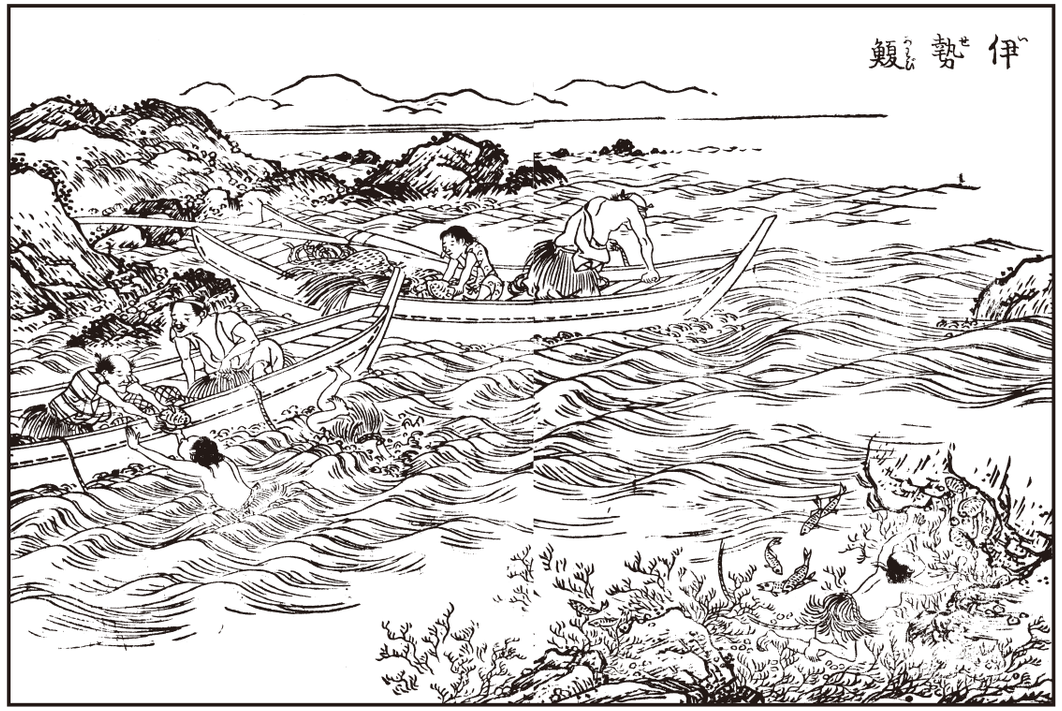


骨角製のアワビオコシ
伊勢湾口近辺ではたくさんの骨角製の漁具と思われる考古資料が出土しています。これは、獣の骨角を利用したアワビオコシではないかと推測されています。また三河湾篠島の「神明社遺跡」からも出土例があり、両者の深い関係が推測されています。

木簡（模造）
この平城京跡出土木簡には

志摩国英虞郡名錐郷
戸主大伴部国万呂□同部得嶋御調
鮑羅鮑　六斤
天平十七年九

と記されています。「天平十七年」は745年、「名錐」は「波切〈なきり〉」で現在の志摩市大王町波切。「鮑〈アワビ〉」の文字が記されています。また「鮑羅」は現在の韓国済州島の旧国名と考えられており、もしこれが正しければすでに当時、志摩と済州島の間に、なんらかの交流があったことになります。



「日本山海名産図会」　寛政11年(1799)
日本山海名産図会は江戸時代に全国各地の名産品を紹介した図鑑です。その中に「伊勢鰒〈あわび〉」と題して、鳥羽志摩地方のアワビ漁が紹介されており、ヒキヅナを腰にくくりつけた海女の姿が描かれています。右下の絵は海底のようすです。

「三重県水産図解」　明治16年(1883)
三重県水産図解は第１回水産博覧会に出品するために三重県が製作した図解で県内の漁法や魚種が克明に描かれています。「蜑婦焚火ニ躰ヲ温タメ休足ノ図」は漁を終えた海女が火を囲み暖をとるようすが描かれています。